

会報 八丈島三根会



三根会ホームページ 八丈島三根会 🔍

検索

八丈島と三根と私達！



LINE 三根会

Vol.
8
2024.05.19

第42回八丈島三根会開催日発行

八丈島三根会

三根会開催日程 クラスの近況	三根会会報誌 三根会写真集	三根会参加申込 八丈島関連動画	組織や団体など 八丈島リンク集	その他の情報 読者投稿記事
-------------------	------------------	--------------------	--------------------	------------------

HOME

三根小学校
2019 運動会

東京及びその近郊で
楽しめる八丈島の食季

令和6年5月19日(日)12時よりホテルグランド
ヒル市ヶ谷にて三根会総会を開催します。

■わたしたちは八丈島生まれ、八丈島育ち
東京から南へ海を渡って290キロ、ここは太平洋への玄関口、南海の島「八丈島」。碧い海と緑の山に囲まれ、豊かな自然に恵まれた島です。私たちはここで生まれ、育ちました。
八丈島三根会は三根小学校の卒業生、三根地区出身者によって東京で作られたふさふさの会です。
昭和57年に在京そして関東近辺に住んでいる先輩の方で結成され、毎年、三根会総会が大手ホテルなどで開催されています。 三根会総会実行委員会

最新情報
※ホームページの更新情報を掲載しています。
●5/1 八丈島と花(写真提供:持丸サエ子)を掲載
●2/13 三根会「島でよさる」写真集2023を掲載
●11/2 「東京…近郊で楽しめる八丈島の食季」を更新
●10/6 リンク集のデジタル南海タイムス「ny」に「Birthday TIMES」のリンクを追加
●6/24 「東京…近郊で楽しめる八丈島の食季」を更新
●5/19 東京愛ランドフェア「島じまん2023」を掲載
●12/19 「学年クラスの近況 会報vol.4~6」分を掲載
●12/17 「学年クラスの近況 会報vol.1~3」分を掲載
●12/13 「学年クラスの近況(28年度卒業)」
●12/13 「学年クラスの近況(31年度卒業)」

お盆の八丈島2019

年末年始の八丈島

居心地の良い生活空間

昭和三六年度卒 八丈島三根会会長 峯元 信博

令和6年の今年は年頭の始めから大きな災害が始まっています。今もって苦難の生活を強いられている能登の人たちの姿をニュースで見ると、心が痛みます。私たちの身の回りではニュースやネットの情報で日々、日本中どころか世界上のニュースが忙しく飛び込んできます。戦争や災害をはじめ、政治、社会問題、芸術、スポーツなどの多くの出来事です。情報はもちろん悪いニュースだけではありません、ハッピーなニュースももちろんあります。スポーツの世界では今や世界のスター選手となった大谷選手はじめ、サッカー選手、その他のスポーツでも多くの日本人たちの活躍が毎日、報じられています。他にも日本の漫画やアニメでも世界を賑わしています。それらを毎日、見聞きしている私たちは個々の思いで受け止めて、ため息ついたり喜んだりしているのではないのでしょうか。家で寛ぎながらニュースを見る空間、家で手芸や趣味を楽しんでいる空間、そんな時間、空間は居心地の良い生活空間の場所の一つだと思います。

2020年に始まったコロナ感染拡大は世界中に広がりました。その影響はあまりにも大きいものがあります。日本はもちろん、全世界の人々の生活が一変しました。私たちの生活空間は狭められ、外へ出ることも難しくなり、狭い生活空間の中で過ごす毎日でした。一日中、家に閉じこもり、外に出るのは買い物に出るくらいだった人も多いと思います。旅行や遠出の移動もままならず、外に出るときはマスクが必須で人込みを避けての移動でした。仕事も通勤も控えてリモートワークが当たり前になりました。あの時はそんな狭い生活空間の窮屈

な3年間だったと思います。そんな状況の中でも居心地の良い生活空間がありました。家の近くを散歩したり、人ごみを避けて小さな公園で佇んだり、カフェの隅っこで休息したりしていました。そんな小さな場所も居心地の良い空間です。また、今まではあまり利用しなかった自転車に頻繁に乗るようになり、窮屈な家を出て外に出かけるサイクリングも気持ちの良い空間でした。コロナ下でも新しく見つけたそんな生活空間で過ごした時間は居心地の良いものでした。最近はやくコロナ前の日常に戻ってマスク着用の姿の人も少なくなってきました。外出も以前のように気軽にかけられるようになってきました。外です。しかし、それでも私たちの生活空間の多くは自宅です。暖かい家族が多いと思います。家の行動では家事は必然ですが、暖かい家族での食事の時間、読書や趣味の時間、何もしまったりした時間、そして睡眠時間も含め、家での生活空間はやはり安心してくつろげる空間ではないでしょうか。そして外での空間はどうでしょうか。仕事以外で買い物に出たり、カフェに寄ったり、偶には遠出して都心や郊外へ出かけて気分転換したりしている人もいます。友人や友人との飲み会の場、コンサートや演劇の会場、また、パチンコや競馬場、これらもすべてきつと居心地のよい生活空間ですね。そして今では堂々と帰省や旅行などの移動も問題ありません。故郷八丈島へ帰り、潮風の香る海辺の海岸の散歩、緑がまぶしい山を眺めながらのわき道の散歩、旧友、親戚との集まり、そんな空間ももちろん居心地が良いですね。

日常の生活の中で探せば他にも結構、居心地の良い空間はあるものです。そして自分で自ら、その居心地の良い空間を作ることにも出来るのではないのでしょうか。それでもどうでしょうか、やはり一番は落ち着ける自宅での日々の夕時の家族団らんの空間かもしれません。そしてまた、今日の三根会のこの会場での団らんも私たちの居心地の良い生活空間です。

島民に影響を与えた漂着船

大海原に囲まれた八丈島は、大昔の頃より周辺の海を航海している船が嵐や事故にあつて、島に漂着していた事実がある。そのような漂着船は過去にどのくらいの船が流されてきたのか気になるところです。

古い記録の一つに北条五代記による氏直の時代に5年に一度、秋に下田から北風に乗つてこの島に渡るとの記述があるという。確かに今の東京湾から来るよりは下田の方が距離的には近い。残念ながらこの記録の以前の時代の記録は見当たらないらしい。しかし、さらに昔に遡つた時代からも漂着船が続いていたことは容易に想像できる。

その後、江戸時代、伊豆七島は幕府直轄の法定流刑地であつたから、島民の自由な交通や交易はもとより、他の国地からの旅人の入島もできなかった。したがつて、諸国の廻船や漁船も、漂着以外には島に近づくことはできなかった。この八丈島と内地を結ぶ唯一の定期船は官船であつてその出船入りは島民にとつて待ち遠しいものであつたという。黒潮の流れに乗つた漂流船はそのほとんどが点在する伊豆諸島を通過し、再び帰るすべもなく、むなし洋上に消え去つたことであらう。中には島々を眼の前にしなから、不運にも流れ去つた船も多かったのだろう。八丈実記によると八丈島、小島、青ヶ島に漂着した船は記録されている1474年から1865年の間、約390年間に199艘を数える。それも寛保年間から明和年間に至る31年間の記録が欠如しているから、事実はそれよりもはるかに多かつたであらう。特に多かつたのは1850年（寛永3年）で一年間に27艘、300人以上の人々が漂着している。記録されたものうち、はつきり

している180艘を分類してみるとその遭難時期は12・1・2月の3か月に7割近くが集中している。これは北西季節風によるものであつて、台風による遭難はわずか11艘を数えるのみである。地方別では、大阪を含む摂津が48艘で最も多く、これに対して江戸船は11艘で、やはり西南日本の大藩の所在地が多くなつている。そのほとんどが江戸への上り船で、当時の太平洋側の海上交通の勢力関係を反映している数字といえる。

この当時、島に住んでいる人々にとつて漂着船の積荷は何物にも代え難い貴重な救援物資であつたという。島民は漂着船の来ることを望み、乗組員を精一杯歓待したのである。漂着船の積荷に関しては嚴重な取り締まり規定があつて、勝手に横領することは許されなかつたが、島民と船頭との話し合いで、積荷の処分はかなり自由であつたようである。当時の規定では漂着船の積荷の1割が島方のもものになり、残りは再出航の時に積み込むことになつてはいるが、船も破損している場合が多いので、島で買い取つていくことが多かつた。船員が死亡して着く場合や、船が沈没して積荷を引き上げた場合はその全部が島方のもものになつた。船が難破し岸に漂着した荷物は二十分の一が島方のもものになつた。城米船や藩船でさえ、漂着の時は積荷を島に与えたので、これに対する島民の歓喜は非常なものであつた。元禄年間には、記録されている漂着船だけでも10艘以上あり、そのうち4艘からはこめ五百俵から千俵内外を陸揚げして、困窮している島民に配つた、ということである。昔の八丈島では飢饉が頻繁にあつたということなので漂着船の積荷の物品は島民にとつて貴重なプレゼントになつたようである。

*八丈島誌より抜粋

八丈島の石碑

八丈島にはさまざまな石碑が古くから点在しています。これらの石碑は主に墓碑や記念碑として建てられ島の歴史を物語る貴重な文化財です。

そしてその歴史的背景や文化的な意味合いから多くの人々を引きつけてきました。八丈島へ訪れる際には、ぜひこれらの石碑を尋ねてみてはいかがでしょうか。

1 抜舟の場 三根

八丈島に流された流人が船を盗んで島を脱出しようとした場所です。江戸時代には15回の抜舟が試みられましたが、成功したのは1回だけでした。その1回の成功者も、本土に上陸した後に捕まってしまったそうです。抜舟の罪は死罪でした。抜舟の場には、流人の悲劇を伝える碑や看板が立っています。



2 八丈島西山ト神居記碑 三根

この碑は、食糧を確保するために島の自然を開発しなければならぬ伊豆代官羽倉外記（簡堂）が、天保五年（1834）に建立したもので、碑文の内容は次の通りです。

八丈島は南海の絶島であり、気候はいたって不順である。元乗山と手石山の間に海神が住むといわれ神止山と呼ばれた。文化年間（1804～18）に島民の高橋与一がこの山を開拓し、多くの島民の食糧難を救った。その後天候不順が続いたため、人々は神の住む場所が無くなったからだと恐れ、開墾を止めてしまった。羽倉は、神が愛するの民であつて山ではない、と開墾を続けさせた。一方で島民の気持ちを探して、西山に神を移させた。そして、もし神罰があるなら、自分一人が受けるとそこに刻まれています。碑石は灰色の硬質自然石で、表面を研磨して碑文を刻んだもので、書家の市河米庵や石工の広群鶴の名も刻まれています。

3 近藤富蔵居宅跡石碑 三根

近藤富蔵の居宅跡石碑が、むつみ保育園（第二では無い）の前の道を尾崎橋（ナポリ近く）へ向い、鴨川手前の畑の中に立っている。富蔵は明治十三年（1880）に一旦赦されて本土に戻ったが、翌年十四年帰島した。その時に起居した住居跡に建てられた石碑です。

4 三根戦没者招魂社 三根

招魂社は、三根地区の維新以降の戦没者などを

祀る。沖山玉一君忠魂碑は東郷平八郎の書。浅沼由太郎は日清戦争の戦死者である。

招魂社とは、明治維新のために殉難した死者を慰霊する目的で諸藩に設けられた招魂場に由来し、明治維新前後から、また以降に国家のために殉難した人の霊を祭る各地の神社のことです。1939年に招魂社は護国神社と改称されましたが、戦後は一部の神社が旧称に戻っています。



5 近藤富蔵之碑 三根

（開善院善光寺）

富蔵は文政十年（1829）八丈島に流され、以来五十年余を島で過ごした。明治十三年（1880）に許されて本土に戻ったが、父の墓参りなどを済ますと、再び八丈島に帰りそこで生涯を閉じた。八十三歳であった。

一家七人の斬殺という残酷な事件を起した富蔵であるが、八丈島では敬虔な仏教徒として過ごし、『八丈実記』六十九巻を表して八丈島の歴史や風俗を集録して紹介した。

6 慈運法印の碑（御赦免花の祖） 大賀郷

（宗福寺）

慈運法印は、江戸時代に不受不施という日蓮宗の一派に属していた僧侶です。彼は無実の罪で八丈島に流されましたが、赦免を求めて断食を続けて死にました。彼の墓にはソテツの花が咲き、その年には必ず赦免状が届いたと言われています。そのため、御赦免花と呼ばれるようになりました。大赦をうけた流人たちが慈運に感謝の意をこめて、御赦免花の碑を建立しました。もとは大賀郷馬路にあったが、昭和四十二年（1967）、宗福寺境内に移されました。

明治政府も流罪制度を継承し、明治四年（1871）まで島送りは続けられましたが、明治十四年（1881）に全ての流人が赦免されました。

7 鳥島罹災者招魂碑 大賀郷

明治35年8月（1902年）に鳥島で起きた大噴火で亡くなった居住者125人の犠牲者を慰霊するために建てられた招魂碑です。その多くは八丈島出身であったため護神山の麓に招魂碑が建てられました。

鳥島は現在は無人島で、特別天然記念物のアホウドリの生息地として知られています。

8 島酒の碑 大賀郷

島酒の碑は、八丈島に芋焼酎の製法を伝えた丹宗庄右衛門翁の功績をたたえるために建てられた記念碑です。碑は護神山の麓にあり、周囲には酒

甕が置かれています。

丹庄宗右衛門は、薩摩国阿久根出身の薩摩藩御用の回漕問屋であった。調所広郷のもとで琉球との密貿易に加担していたが、嘉永六年（1853）、密貿易を密告されて捕えられ、八丈島に流された。

当時の八丈島は米がとれないため、稗などで作ったドブロクが主流であった。

島でサツマイモが栽培されていることを知った宗右衛門は、薩摩から蒸留器を取り寄せ、島民に焼酎作りを伝授した。



9 浮田半平功勞碑 大賀郷

西の港であった前崎港は玉石の浜ので不便な港

であると、宇喜多秀家の次男秀継から11代にあたる浮田半平が村を勧誘して八重根港を開いた。その功勞を称え、近藤富蔵が自ら石を探し、文を彫り、半平の妻である加登が明治元年（1868）に建立した。

10 八丈島甘諸由来碑 大賀郷大里

この石碑は、八丈島にサツマイモが伝来した経緯を記念して建てられた石碑です。

八丈島にサツマイモが伝来したのは、1723年（享保8年）ですが、当時はあまり普及しませんでした。その後、1811年（文化8年）に菊池秀右衛門が赤サツマ種を、翌年に子の小源太がハンス種を新島から持ち帰り、全島に広めたとされています。この石碑は、菊池右馬之助が、祖父、父の功績を讃えて1866年（慶応4年）に建立したものです。

八丈島では、サツマイモのことを「かんも」と言いますが、これは唐芋から、かんもと呼んだものです。サツマイモの伝来により、八丈島では飢饉の回数と被害が減り、人口も増えるという食料革命が起こりました。

11 八丈小島忘れじの碑 大賀郷

1969年6月、八丈小島全島民の約70人が離島し無人島となった。全島民が離島した八丈小島の歴史と人々を偲ぶために、2014年11月2日に八丈小島を偲ぶ有志一同と八丈島ライオンズクラブによって大賀郷南原園地駐車場に建立された記念碑です。碑文には、元鳥打村村長の鈴木文吉

氏が詠んだ詩が刻まれています。

12 宇喜多秀家公と豪姫の像 大賀郷

関ヶ原の合戦で、公式の鳥送りの第一号として八丈島に流刑になった宇喜多秀家、夫とふたりの息子を島に送られ、案じながら金沢で暮らした豪姫の波乱の人生を象徴するシンボルになっているのです。

実際に豪姫は八丈島を訪れることはなかったのですが、宇喜多秀家と豪姫の像はイメージで制作されたものです。



13 和歌山県民感謝の碑

大賀郷

明治25年12月28日、紀州熊野沖で突然の暴風で



遭難した和歌山県サンマ船団の生存者179名を、八丈島民が助けたことに感謝を込めて建立されたものです。

和歌山県から八丈島に「感謝の碑」を建てる会の皆さんが来島して建立されました。

14 大坂隧道之碑 大賀郷

1907年に日露戦争の戦勝記念事業として、大坂トンネルと大里を結ぶ新道が建設されました。工事の途中では、何度も大崩落が起こって、そのつど犠牲者を出したうえ、政府や東京府からの補助金はなく、島民からの税金だけで造られたため、倒産する会社が出るなど、大変な難工事でした。

現在は、新しい大坂トンネルに代わっています。現在、旧トンネルは保存されており歴史的な価値が高く評価されています。

15 源泉由来記の石碑 檜立

この石碑に関しては調べてみましたが詳細が分かりませんでした。グーグルマップのストリートビューを見ると石碑には説明の文字が刻まれているようです。

菊池ハイヤーの場所を道なりに八丈島シーサイドゴルフクラブへ向かう途中にあります。

16 乙千代ヶ浜海岸環境整備事業完成記念碑 檜立

この記念碑は、乙千代ヶ浜海水浴場にあるもので、海岸の美化や保全に関する事業の成果を示すものです。

この場所には、乙千代ヶ浜海岸環境整備事業完

成記念碑の他に、八丈節の碑、檜立踊り手踊りの碑、などがあります。

【八丈節Ⅱシヨメ節】

17 明和飢饉餓死者冥福之碑 中之郷

明和年間（1766～1769）の飢饉を追悲して建立したものです。中之郷一ヶ村で餓死者が733名を出し、生き残ったのは400名足らずでした。

餓死者冥福の碑は、八丈島の歴史とその過酷な過去を偲ばせる重要な資料で、絶海の孤島で生きることの難しさを伝えていきます。

18 為朝神社石宮 中之郷

石宮は、島内産のかんらん石玄武岩を用い、流人の石工仙次郎が天保11年（1840）に造ったもので、石工の技量がみられる貴重な資料です。なお、中之郷の三島神社にも同型のものが建てられています。

19 第十六震洋特別攻撃隊記念碑 末吉

（名古の展望台）

特攻艇「震洋」隊とは木造一人乗りモーターボートの艦首に爆薬を装着し、これに乗って集団で敵艦目掛けて突進する部隊です。

第十六震洋隊は昭和20（1945）年3月八丈島に派遣され、洞輪沢の岩壁に震洋を格納する壕を数本作り、アメリカ艦隊を待ち受けていました。終戦まで第十六震洋隊に出撃の機会はありませんでした。

20 東光丸殉難者慰霊之碑 末吉

昭和20年4月16日正午過ぎ、学童8人と教員8人を含む島民55人のほか、島内の野戦病院から本土に送還される傷病兵24人、看護兵7人、その他乗組員など160人を乗せた疎開船「東光丸」（約530トン）が、八丈島神湊港から横浜を目指して出港しました。

第四号海防艦1隻が護衛していたものの、東光丸は午後3時2分、御蔵島の南方約32kmの地点で米潜水艦「シードッグ」が発射した魚雷2本を船腹に受けて転覆し、数十分後に沈没。敵飛行艇の襲撃を恐れてほとんどの乗客が船倉にいたために逃げ遅れ、学童を含む乗員乗客149名が死亡する大惨事となりました。沈没時に甲板にいた乗組員10人と看護兵1人の11名のみが助かり横須賀に運ばれました。戦時下では東光丸の撃沈について口外することは許されませんでした。

その後、東光丸の沈没に関する史実とその悲劇を語り継ごうとする島の有志たちによって慰霊之碑が建立されました。

この記事を書くに当たっては、Windows パソコンの「コパイロット」という生成AIを補助的に活用させていただきました。

八丈島の石碑には、輝かしい実績ばかりでなく、悲劇的な出来事を記念したものもあり、島の歴史・文化・記念などを半永久的に残す重要な役割となっています。

これらの石碑で、これからも色あせない史実として後世に伝えられることを願います。（本庄）

わいらがもてなしたけじゃ

昭和四一年卒業 平井園子(三根婦人会副会長)

2020年からのコロナウイルスによるパンデミック、2023年、公的施設での飲食が可能になり元の生活に戻り始めた8月「八丈島三根会」から三根婦人会に料理の依頼がありました。

220名分のオードブル、島寿司、今は希少品になったハンバや島海苔のおむすびを、準備を含め三日間、16名で調理に取り組み、会員のプロ集団のごとき働きで遺漏なく仕上げることができました。

美味しかった、島料理懐かしかった、きんぼを久しぶりに食べた。などと声をいただき、会員一同で喜びを分かち合いました。

島の食材をたくさんの方々から寄付していただいたこともご報告します。

ねぎらいの言葉と共に「おめーらも会場で楽しみたからんのーに、次は他の地域の婦人会に料理は頼んで参加しやれよー」と言ってくくださる方が居ました。

私は「うん・うん」と思ったのですが、調理に取り組んだ一人が、

「そいもそごんどーが……。あだんのー、わいらがもてなしたけじゃ」

と言うのを聞いて、なんてボランティア精神に溢れた言葉だろうと、改めて脈々と続いてきた婦人会の精神

三根婦人会の島料理にみんなで感激！



に触れた想いがしました。大変ではありましたが調理で参加できたことうれしかったです。

もう一つ感謝すべきこと。

両親が居なくなると故郷から足が遠のく話はよく聞きます。

私の姉二人も親の存命中は毎年子供を連れて帰省していましたが御多分に洩れず父の死後は足が遠のいていました。

そんな姉たちが三根会参加のため久しぶりに帰省し数日を楽しく過ごすことができました。

私達姉妹に限らず、学び舎を共にした島を出た者と島に残った者が島の空気の中で時間を過ごせたと、その機会を作ってもらえたことに感謝して「またの「島でよさろー会」を楽しみにしています。

年々変わり行く世の中

昭和二五年卒業 持丸サエ子

近年は都会でも田舎でも町の様子が大きく変わるどころが多く暫くぶりに訪ねようものなら目的地に迷わずにゆくことが出来なくなった。

品川駅渋谷駅しかり東京駅八重洲口側丸の内共に見覚えのない高層ビルが立ち並びよそよそしく、駅舎に入ろうものならよくできた迷路、時間に余裕が無からうものなら焦ります。八丈島も富士山の裾野辺りは車で一・二度訪ねた位ではどこにどうつながる道が在るのかここは緑の中でさっぱり分からず一人では歩けそうになり、その点昔のまま変わらない通りは歩いてても車で通っても懐かしい、地名(部落名)も昔のままなのでしょうか?一心とか孫兵衛・宮の平・与惣次とか。私は神港西、垂土に育ちました、海辺でもなく山の中で今も余り変わりなし。

嘗ては夏になれば待つてましたとばかりに海へ海へと底土・神港・垂土へと誰もが歩いて行ったものだけど今は車頼りの島の暮らし車で何処へ行くのでしょうか?垂土海岸へ途中開けた畑地へ出る手前に小暗い処が在り誰に言われた訳で

もなく子供達は柿の葉などを、葉の持ち合わせのない子はその辺の木の葉を手折って供え殊勝顔で何かを拜んで通っていたように覚えている。つい最近勇気を出して藪をかきわけてみたが何もなく雑木の根が溶岩を抱き込んで薄暗いだけ、子供心にはとても怖くて覗き見るなんて考えられなかったが今となっては石仏らしきものでも祀ってあげていたら御利益大だったかもと。でもあの頃海での事故などあった

事は聞かなかつたので信じて願う心だけは通じ効験は充分にあったのでしよう。

垂土の浜の様子も大きく変わり子供達で賑わった「大がめ・小がめ」は外海の濤にのまれ今はあのあたり・・・としか分らない。



2024年3月記

第1回 八丈島三根会島でよさろー
2023. 11. 19
思い出の写真集!



三根会ホームページでもっと見られますよ。



第42回八丈島三根会総会

- 12:00 三根会総会開催 (司会 幹事長 鈴木 茂)
会長挨拶 会長 峯元 信博
会計報告と会計監査報告 鈴木 茂
来賓挨拶 八丈町町長 山下 奉也
来賓挨拶 八丈町議長 山本 忠志
来賓挨拶 三根小学校校長 川畑 伊豆海
来賓挨拶 都議会議員 三宅 正彦
- 12:30 乾杯 顧問 太田 中
<歓談>
- 12:55 懇親会 (司会 幹事 本荘 薫や)
ビデオ上映 第一回 三根会島でよさろー
しよめ節 有志
恩師紹介
学年クラス紹介 有志
<歓談>
- 14:10 校歌斉唱 (全員) 会員有志
万歳三唱
- 14:30 終了

三根小学校校歌

作詞 野口雨情
作曲 藤井清水

一、朝日はのぼり輝やきて

八丈富士の峰高く

仰ぐわれらの三根校

仰ぐわれらの三根校

二、剛健不撓の精神に

流れも強き黒潮の

沖ゆくごとく進みなん

沖ゆくごとく進みなん

三、磯うつ浪の絶ゆるなく

朝に夕べにいそしみて

いざもろともに励みなん

いざもろともに励みなん

協 賛

- 有限会社 坂下酒造 (焼酎)
- 八丈興発 株式会社 (焼酎)
- 佐々木 敏仁・典子 (あしたば)

協 力

- 八丈島町役場
- 八丈町立三根小学校
- 八丈町立富士中学校